

追悼・吉田勝次さん

非凡な構想力と行動力

伏田 昌義

JIC 国際親善交流センターの専務理事であり、ジェーアイシー旅行センター(株)の設立時の代表者であった吉田勝次さんが、昨年2月に逝去された。JIC の設立前後から約10年間、JIC の対ソ連(ロシア)交流を引っ張った吉田さんを偲び、思い出をしるします。

* * *

初めて吉田さんと会ったのがいつのことなのか、よく覚えていない。初めて電話で話した時のことはよく覚えている。1975年、私が大学4回生の5月だった。学生の集まりで平和問題について講演をしてもらえないかと電話した。学生運動の「伝説の大先輩」だと聞いていたので、緊張しながら恐る恐る電話をかけた。「その日は不可能です。私は○日から○日まで海外出張の予定で、日本にはいません。」きわめて簡潔、明瞭。とりつく島もなく「それではごめんください」、ガチャンと電話はすぐに切られた。実際には「ではまた次の機会にお願いします」とか何かやりとりして電話を終えたのだろうが、印象としては、「不可能です」というきっぱりした物言いに圧倒されて、次の言葉が出て来ないうちに一方的に電話を切られたような気がする。愛想のない、機能一辺倒の人、という第一印象だった。その時は、まさか数年後に、上田卓三事務所で吉田さんの部下として働くことになるとは夢にも思わなかった。まして、35年間もの長い付き合いになるとは思わなかった。

仕事においても、日常生活においても、吉田さんは、豊富な語彙の中からの的確な言葉を拾い出して、きわめて明瞭かつ鋭い言葉を発する人だった。話をするだけで、曖昧で不透明だった頭の中が秩序づけられ、一定の方向に整理される思いがした。国際政治や国内政治の諸問題を、さまざまな角度から切り取り、「人民の利益」にとって何が大事かという一貫した視点で、方向付けをしていく。声がかたく、エネルギーにあふれた吉田さんと話をすると、こちらもつい引きこまれ、元気になって、やる気が出てくる。吉田さんは天性のアジテーターだった。とはいえ、吉田さんの論理にうっかりそのまま乗ってしまうと、自分をとんでもないところに追い込みかねない危険性があり、相槌を打ちながらも、「さて、どうやって切りぬけようか」と考えることしばしばだった。

「伏田君、上田さんの政策活動を手伝ってくれよ！」、

「何か自分のテーマを決めて勉強しなきゃダメだよ！」、「ロシア語を勉強しろよ！」、「日ソ関係で論文を書けよ！」……。吉田さんのような能力のある人間になりたいと憧れつつも、もう一方で「いや、とても吉田さんのようににはできない」と自覚している私は、生来の怠け癖も手伝って、折りあえば逃げ出そうとする。しかし、そんな私を、時に襟首をつかんで引きもどし、時に尻を蹴飛ばしながら、吉田さんはグイグイと引っ張って行った。

大学を卒業してわずか2~3年の若造に、海外旅行が初めてにも関わらず300人の大旅行団の添乗員をさせたり、ロシア語どころか英語もまともに出来ないのに「青年の船」の事前打ち合わせにソ連(ナホトカ)に出張させたり、一流学者を集めた国際シンポジウムで司会をさせたりと、上田さんと吉田さんの人使いは滅法、荒っぽかった。

吉田さんには、仕事の仕方を教えてもらった。

上田卓三衆議院議員(故人/大阪四区選出/社会党/1976年12月から1993年7月まで衆議院議員)の秘書として吉田さんの下で働いた日々、随分いろいろなことを教えていただいた。1979年頃から国会が開かれる度に大阪から東京に駆り出され、国会質問の下準備や政策関係の仕事を手伝った。

当時、上田さんは内閣委員会に所属していた。内閣委員会は、外交委員会や文教委員会といった大きな政策テーマを扱う委員会ではなかったが、これらの主要委員会では扱われない「その他すべて」の課題が審議される委員会だった。上田さんが部落解放同盟大阪府連委員長として全力で取り組んでいた同和対策もその一つだったが、防衛庁関係や人事院関係の法案、皇室関係、その他さまざまな課題を扱っていた。当時の政治状況は、国会で圧倒的過半数を握る自民党に対して、社会党をはじめ野党は、「徹底審議」という名分で最大限に質問時間を引き延ばし、自民党が提出する法案の成立を阻止する抵抗戦術を議会内で繰り広げていた。委員会で審議される法案が決まり、質問時間が割り当てられると、その法案に関連しようとして関連してまいと、質問材料をかき集めて、時間一杯質問を繰り広げるのが野党議員の役割だった。国会質問は野党議員にとってはほぼ唯一の「出番」なので、みな張り切って質問作りに取り組んでいた。そんな中で、上田さんの国会質問原稿作りは吉田さんが一手に引き受けていた。

吉田さんの仕事ぶりは徹底していた。質問のテーマと内容を大まかに決めると、そのテーマにそった過去一年分くらいの新聞切り抜きを時系列に並べてさっと読み飛ばす。問題の概要とポイントを掴みとると、次は大きな書店で専門書を当たり、国会図書館に関連図書を請求し、あるいは過去の議事録を取り寄せ、徹底的に読み込む。(図書館

から借りた本でも平気でグイグイ太い線を引きながら読むので、あとで大クレームが来たが、とにかく本を読むのが速かった)。さらに、関係団体や利害関係者を直接取材して、問題の焦点を明確にする。そうして、いくつかのジャンル別のメモをまとめると、「さあ、書くぞ！」と大きな声で宣言し、ねじり鉢巻で一気に原稿を書き上げるのだ。こうなるともう誰の声も耳に入らない。その集中力とスピードはすさまじかった。国会事務所は、昼間は来客が多くて忙しいので、原稿書きはしばしば深夜に及んだ。「伏田君、論文でも何でも、こういう文書は結論から先に書くのが大事なんだよ」。後輩への実地教育も忘れない。

たいがいは質問の前日までに原稿を作り上げ、関係省庁担当者に質問概要を通告し、同時に上田さんへのレクチャーと最終打合せをするのだが、時には原稿作りが当日までズレ込むこともあった。しかし、何があっても吉田さんは間に合わせた。きっちりと仕事をする吉田さんもすごかったが、吉田さんに任せっきりにして、当日朝に悠然と現れ、簡単な打合せの後、1時間でも2時間でも国会質問に立つ上田さんもすごかった。原稿棒読みの場合もないわけではなかったが、しかし、それでもツボは外さない。ここはもう一押しというところでは、しつこく大臣や政府委員に食い下がった。

やがて、国会質問の原稿作りに飽きた吉田さんは、私や他のスタッフにその仕事を振り向けるようになった。大まかな方針を指示すると、有無を言わず「あとは頼むよ！」とくるので閉口したが、見よう見まねでやるしかない。新しい課題に取り組むとき、私は、いつしか吉田さんのやり方を見習いながら、資料を集めたり、論点整理をしたりする方法を身につけていったように思う。もちろん、吉田さんと同じようにはとてもできなかったが、吉田さんには技術的なことだけでなく、仕事に取り組む姿勢や熱意といったものをより多く教えられたと、今でも感謝している。

上田卓三さんは、ソ連やモンゴル、中東、アジア、アメリカなどを次々と訪れ、熱心な「議員外交」を展開した。中でもソ連とは、社会党代表団の一員としてしばしば訪問し、また日本にソ連代表団を受け入れるなど、幅広い交流のパイプを築いた。

厳しい米ソ冷戦の下で、日ソ関係が最も悪化し緊張していた時期に、上田さんはモスクワオリンピックにエアロフロート(ソ連航空)機を2機チャーターして300名の代表団を派遣した(1980年)。翌年からはソ連極東の港町ナホトカに『青年の船』を毎年出し、大規模な青少年交流を組織した。ソ連から政治家や学者を招待して日ソ・シンポジウムやセミナーを度々開催した。このような日ソ友好交流を推進する組織として、1982年12月に上田さんは、国際親善交流センター(JIC)を設立した。

吉田さんは、上田さんが外遊するときは必ず同行し、その英語力を駆使して上田さんの国際活動を強力に支えていた。日ソ交流においても、上述したような企画を次々と提案し、圧倒的な交渉力と実行力で、それらを実現に導いていった。国際親善交流センター(JIC)の専務理事として、吉田さんは、上田さんの国際交流活動のアドバイザー兼「司令塔」の役割を果たし続けた。

上田さんは、国会議員になる前から、1973年に中企連(中小企業連合会。1996年「ティグレ」に名称変更)を大阪で結成し、中小零細企業の税務・経営相談活動に取り組んでいた。この中企連を、大阪から全国に拡大する第一歩として、1980年、東京に中企連の事務所を開設した。吉田さんは、中企連(東京)の責任者として、会員獲得と組織作りに奔走した。中小企業の経営者とのつきあいは、演説や議論だけではできない。夜の会合や食事につきあう時間も必要になる。時間が少しでもあれば本を読みたい吉田さんが、専門書をカラオケのマイクに持ち替えて、人づきあいするのはあまり嬉しくなかっただろうが、上田さんに惚れ込んだ弱み、不器用ながら一生懸命「おつきあい」に精出して、中企連の拡大に力を注いだ。

興味がないことや価値を認めないことには「何だい、それ！」と言ったきり見向きもしない吉田さんだったが、興味がないことでも必要とあれば、腹をくくって徹底的にやっつけるという一面もあった。しかし、カラオケは下手だった。大きな声で、拳を振り上げながら歌うから、演歌も歌謡曲も、すべてが労働歌か行進曲のようになってしまった。

この中企連活動で、吉田さんは後の人生に大きな影響を与える出会いを経験する。在日台湾人実業家、アジア商事の洪毓盛社長(故人)との出会いだ。川崎で廃タイヤの回収事業を営んでいた洪社長が、タイヤ置き場の「公害問題」で川崎市や取引先親会社から苛められていたのを吉田さんが助けに入ったのが縁で、洪社長は東京中企連の第一号会員になった。しばらくは、ちょっと変わった中企連会員にすぎなかった洪社長だが、若いころ(日本留学時代)に民主活動を行ったために国民党政権から睨まれて帰国できなくなり、事実上の亡命者として、日本で事業を起こし、陰で台湾民主化運動を支えている活動家であることがわかり、その後、吉田さんは台湾問題に関心を深めていく。洪毓盛社長との出会いが、後年、吉田さんが台湾問題の研究者として大学教授の職を得るきっかけとなった。

1977年1月から88年10月まで、上田さんの秘書として12年間働いた吉田さんだったが、上田事務所時代の後半は、国会や中企連の日常雑務から少し距離を置いて、研究活動と著作活動に仕事の力点を移していった。

吉田さんは若い頃から、国際問題の研究者として将来身を立ようと、目的意識的に研鑽を積んできたようにみえる。上田さんの秘書になる前から、転々と職を変えながらも、米ソ関係や中国問題、日本の安全保障について的小論文を書き続けていた。仕事においても、個人的な研究活動においても、その時々、常にいくつかのテーマを掲げ、「今度は、いつまでにこれをやろう！」と目標を明確にして、自分やスタッフを追い込み、精力的に課題をこなしていくのが吉田さんのスタイルだった。

1982年ごろから、吉田さんは小論文では飽きたらず、上田さんが設立した出版社、にんげん社(現、にんげん出版の前身)を舞台に、書籍の編集や出版に意欲を燃やすようになる。82年に「アジアの平和を考える」(新時代社)という本を編集・出版したのを手始めに、「マスコミが報道しないレフチェンコ事件の真相」(83年にんげん社)、「大統領の犯罪」(84年にんげん社)、「貧富の差」(85年にんげん社)と、吉田さんはたてつけに本を執筆し出版した。

ソ連でゴルバチョフ政権が誕生しペレストロイカが始まると、2冊のゴルバチョフ論文集(「未来への構想」1986年、「革命」1987年)をはじめ、「改革の振り付け師」と呼ばれたアレクサンダー・ヤコブレフの著作の翻訳出版(「星条旗と暴力」1987年)など、著述活動のペースはさらにあがった。

秘書が日常業務以外のどんな仕事をしていても、自由にやりたいようにやらせてくれた上田さんもたいしたものだったが、秘書業のかたわら旺盛な研究・執筆活動に取り組み、しっかり実績を積み上げていった吉田さんも立派なものだと心から敬服する。

学生運動時代から「暴れ馬」の印象が強く、大学卒業後も上司と衝突しては会社を辞め、職を転々としていた吉田さんが、上田卓三という底知れぬ度量の大きな政治家とめぐりあい、その才能を全面的に開花させる場所を得たのだと思う。その意味で、上田さんとの出会いは、吉田さんの人生にとって決定的だったと私は思う。大学で学生運動に邁進し、共産主義者、マルクス・レーニン主義者として強固に理論武装し、その鋭い論理力を手がかりとして世の中を突破してきた吉田さんにとって、部落解放運動や中小企業運動、複雑な社会運動で鍛えられ、政敵を含めすべての人を巻き込み、魅了してやまない上田さんという政治家は、おそらく初めて出会うタイプの人間だったのではなかろうか。知識の量や論理力だけでは量れない大きな力と人間的魅力を上田さんから感じ取り、吉田さんは上田さんに惚れ込んでいったのだと思う。上田さんと一緒に仕事をする中で、吉田さんもまたその世界観・人間観を少しずつ変えていったように思われる。

しかし、吉田さんは上田さんから突然離れることになっ



ありし日の吉田さん(左端)

た。1988年秋のことだ。リクルート事件は、社会党内で一種独特の重きをなす政治家として存在感を増していた上田さんにとっても、その右腕として縦横に活躍していた吉田さんにとっても、深刻な打撃となった。この事件で、上田さんは衆議院議員を辞職し、吉田さんもまた上田事務所から去っていった。1980年代後半に日本社会全体をおおったバブル経済の熱波に、当時私たちもまた知らず知らずのうちに染まっており、そのことが判断力を曇らせたのだと思う。同時に、当時の左翼勢力の中にあつた「目的が正しければ間違った手段でも時には許される」という革命的合理主義とでも言うべき誤った考え方が作用していたことも否めない。

しかし、吉田さんは、失敗しても挫折しても、再び立ち上がり、自分の道を切り開いていく不屈の人だった。

上田事務所を辞めた吉田さんは、民間の研究団体である国際問題研究協会を拠り所に、「民主主義」「人間」「改革」「開発」などをキーワードに国際政治の新しいあり方を探求する政治学者の幅広い研究活動を組織しつつ、自ら台湾問題の専門家として復活した。その研究スタイルは、単に文献資料を渉猟するのではなく、台湾政治の現実を担っている民主進歩党および国民党の活動家たちの懐に飛び込み、そこに暮らす人々の喜びや悲しみをも深い共感とともに包み込む、まさに「人民的」でユニークなものだった。台湾の民主化過程に密着した数々の研究成果によって、吉田さんは兵庫県立大学の教授へと転進した。

さまざまな補助金や委託研究などで研究協会の活動資金を捻出しつつ、毎月のように活発な研究会を組織し、同時に自らの研究成果を論文や著作の形で発表し、さらに家族4人の生活を支える。この時期の吉田さんの苦闘と頑張り、とうてい常人のなせるわざではなかった。そのことを思うとき、吉田さんが上田事務所を辞めたいきさつはどう

あれ、私は吉田さんを深く尊敬せざるを得なかった。吉田さんの努力と不屈の闘志にはいつも頭が下がる思いがした。上田さんもまたそんな吉田さんを陰ながら支え、応援しつづけた。

この時期の苦闘が、吉田さんの肉体を蝕んだのかもしれない。大学に籍を得て、台湾から、韓国、モンゴル、中国と、「東アジアの民主主義と政治改革」をテーマに、さらに研究活動を深化させようとした矢先に吉田さんは癌に侵された。だが、吉田さんは挫けなかった。癌とも最後まで立派に闘った。食生活を玄米菜食に完全に切り替え、厳しい食事療法、自然療法を実践した。毎日散歩をし、太極拳をやり、油絵を描くなど、それまでの生活習慣を一変させた。しかも、太極拳の教本を出版し(「太極拳をはじめませんか」王茂斌氏との共著、2007年春秋社)、癌闘病の基本的考え方を本にまとめた(「癒す力〜ガンの患者学入門」2008年にんげん出版)。きわめて強い意志力と自己管理能力をもった吉田さんでなければできないことだった。困難な病との闘いが、吉田さんの思考に内省と深みを与えた。吉田さんの元気一杯の闘病生活は、同じ悩みをもつ周囲の人たちに限りない希望と勇気を与えるものだった。顔を合わせるたびに、逆に励ましてくれる吉田さんに、私は本当に敬服したものだ。

最後まで全力疾走で生きた吉田さん。どんな困難にもひるまず、強い意志力で立ち向かった吉田さん。その苛烈な生き方ゆえに、失くした友人、先輩は多かったが、同時に手に入れた友人、同僚、後輩もまた多かった。その意味で人生の帳尻はちゃんと合っている。生き急いだ一生だったが、最後まで私たちの心に強い光を発し続けて、吉田さんは逝ってしまった。残された者として、困難に直面するたびに、「吉田さんなら、こんなときどうするだろうか」と自問自答しつつ、

日々を送っている。吉田さんと同じようにやることはどうい無理だが、やり方は違って、あの元気と不屈の闘志は少しでも分けてもらいたいと今でも思う。吉田さんは私の心のなかにしっかりと生きている。(2011年5月8日記 ジェーアイシー旅行センター株式会社代表取締役 国際親善交流センター副会長)

吉田勝次さん略歴:

- 1943年1月 横浜市に生まれる。
- 1969年3月 大阪大学文学部卒業
- 1977年1月 衆議院議員上田卓三・秘書
- 1982年12月 国際親善交流センター・専務理事(兼務)
- 1989年4月 日本国際問題研究協会・事務局長
- 1992年6月 ロシア科学アカデミー東洋学研究所で博士号取得
- 1994年10月 大阪経済法科大学・客員研究員
- 1998年4月 姫路工業大学(現、兵庫県立大学)環境人間学部・教授
- 2008年3月 県立大学を定年退官
- 2010年2月 永眠

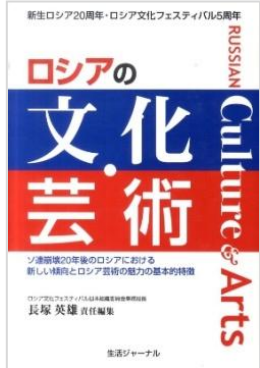
<主な著作>

- 貧富の差 1985年 にんげん社
- 金満ニッポンの階層化社会 1990年 社会評論社
- ツァン、ツァン！台湾民主進歩党 1990年 社会評論社
- 海図なき航海 1991年 田畑書店
- 台湾市民社会の挑戦 1997年 大阪経法大学出版会
- アジアの開発独裁と民主主義 2000年 日本評論社
- アジアの民主主義と人間開発 2003年 日本評論社
- 自由の苦い味 2005年 日本評論社
- 太極拳を始めませんか 2007年、春秋社(共著)
- 癒(なお)す力〜ガンの患者学入門 2008年 にんげん出版



新生ロシア連邦20周年・ロシア文化フェスティバル5周年
記念出版「ロシアの文化・芸術」


**ソ連崩壊20年後のロシアにおける新しい傾向と
 ロシア芸術の魅力の基本的特徴**



ロシア文化フェスティバル
 日本組織委員会事務局長
 長塚英雄責任編集
 発行/株式会社 生活ジャーナル
 企画/株式会社 ロシアン・アーツ
 2011年4月10日発売
 定価:2,800円+税

「森のなかまたち」
極東ロシア・アムールの動物たち

世界的動物作家による森の物語集 第2弾!!
 ヒグマ、オオカミ、トナカイ、シマリス、タヌキ…ロシアを代表する狩人がそと話してくれた、森の動物たち、それぞれが主人公の16話。



フセーヴォロド・P・シソーエフ 著
 岡田和也 訳
 森田あずみ 絵
 四六判上製 224頁
 ISBN978-4-89642-333-4 C0097
 発行/ 株式会社 未知谷
 定価:2,200円+税